環太平洋文明研究の刊行によせて

安 田 喜 憲

（立命館大学環太平洋文明研究センター長）

最近読んだ本（尾本恵市『ヒトと文明』ちくま新書 2016）の中に、坪井正五郎（1863 ～ 1913）のことが書かれていた。坪井は私が尊敬する鳥居龍蔵と対立した人で、コロボックル説（アイヌの起源はフキの下で雨宿りできるような小人だという説）を支持した人でもあり、学者としてあまりいい感情をいだいていなかった（安田喜憲 1987『世界史のなかの縄文文化』雄山閣）。もちろん東京大学も出ることなく独学の青年だった鳥居龍蔵を研究者として処遇したのは坪井だった。しかも坪井は初代の人類学教授として文理融合を推し進めた人であることが書かれていた。「人類に対する自然と人文の両面に好奇心を示した点で、むしろ南方熊楠（1867 ～ 1941）と似ていた」（尾本前掲）とまで評されていた。しかし、坪井のロシアでの突然の客死によって、文理融合を目指した人類学の求心力は弱まり、世の中は学問の細分化傾向の中で、坪井が目指そうとした文理融合の科学は実現することはなかった。

坪井がロシアで客死してから 100 年以上がたった今、学問の細分化は多くの弊害をもたらすようになった。ようやく人々は坪井の目指した文理融合の科学の重要性に目覚めはじめたのではあるまいか。この雑誌『環太平洋文明研究』はそうした文理融合の科学をめざす雑誌である。

川勝平太氏（川勝平太 1997『文明の海洋史観』中公叢書）は、21 世紀は環太平洋文明の時代になるだろうと予測をしていた。私（安田喜憲 2002『日本よ森の環境国家たれ』中公叢書）が環太平洋文明の重要性に気づいたのは 2002 年のことである。

私は梅原猛先生の命によって長江文明の研究（安田喜憲 2009『稲作漁撈文明』雄山閣）を行っていた。図 1 は中国雲南省博物館に収蔵されている前漢時代の青銅器、龍船喰祭舞人紋銅鼓に描かれた彫刻である。ネイティブアメリカンと同じ羽根飾りの帽子をかぶった人が、柱にくくりつけた水牛を生贄にしようとしている。柱の先には羽飾りもついている。その彫刻を見て、最初は中南米のマヤやインカの遺跡から出土したものではないかと思った。あまりにも表現と感性が似ているからである。北米のネイティブアメリカンや中南米のマヤやインカの人々も、山を崇拝し、そのシンボルとして玉を崇拝し、天地を往来する鳥を崇拝し、天地を繋ぐ柱を崇拝し、鳥の羽飾りの帽子をかぶっていた。しかも彼らは 1 万年以上前に北米や中南米に渡ったモンゴロイドだった。長江中下流域で稲作漁撈をはじめた人々と同じ蒙古斑のある人々なのである。しかし、マヤやインカには水牛はいない。図 1 は間違いなく稲作漁撈民がすむ長江流域の中国雲南省から出土

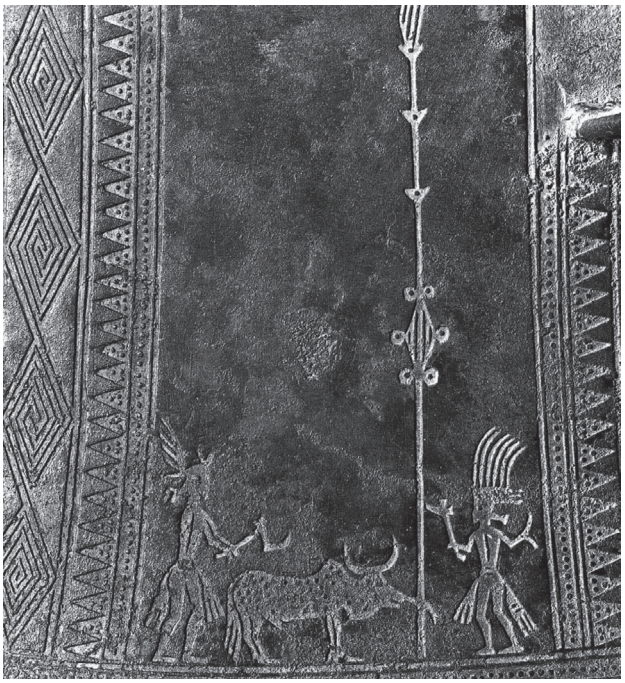

図１　中国雲南省龍船喰祭人紋銅鼓（前漢時代）の青銅器銅鼓に彫金された柱にゆわえつけられた水牛を生贄にする儀礼
（雲南省博物館編『雲南省博物館』文物出版社 1991）

したものである。

そこで私（安田前掲 2002）は環太平洋地域にはかってこうしたモンゴロイドが創造した文明があったのではないかと思った。共通した造形感覚の背景には、共通した文明が存在すると考えられるのである。それを環太平洋文明となづけ、さらに安田喜憲 2008『生命文明の世紀へ』第三文明社では環太平洋生命文明となづけたのである。

ところが天の命は過酷であった。私は病にかかり、手術をうけることになった。もし手術が失敗すれば私の学者人生もこれで終わりだと思った。そこで、洋泉社の藤原清貴氏に無理をお願いして、どうしても後世にのこしておきたいことを入院先の病院で書いた。それが安田喜憲 2015『ミルクを飲まない文明』洋泉社歴史新書である。

手術は無事成功し、私はよみがえることができた。そこであらためて前から書き溜めていた原稿といっしょに安田喜憲 2016『環境文明論』論創社を刊行いただいた。あわせて環太平洋文明のことも再録させていただいた。

学校法人立命館長田豊臣理事長は、文理融合の科学への私の熱い思いとりわけ環太平洋文明研究への思いを理解いただき、立命館大学のなかに R-GIRO（立命館グローバル・イノベーション研究機構）の費用で「環太平洋文明研究センター」を設けてくださった。この雑誌『環太平洋文明研究』は R-GIRO の研究成果である。雑誌のタイトルを『環太平洋文明研究』とすることに研究員の皆様も反対されなかった。むしろ積極的に文理融合の科学として打って出ることに賛意を表された。この雑誌に多くの方が寄稿され、文理融合の科学が未来の日本の科学として進展することを願うものである。

環太平洋地域のシンボルは富士山である。静岡県ふじのくに地球環境史ニュージアム等から発刊するもう一つの雑誌『環境考古学と富士山』も雄山閣で刊行いただけることになった。雄山閣の桑門智亜紀氏ならびに立命館大学環太平洋文明研究センターの事務局の皆様には、この『環太平洋文明研究』の刊行に際して大変なお世話になった。